

profile

きゅうとく・みな ●1990(平成2)年、佐賀県生まれ。阪神・淡路大震災の映像を見たこと、火山噴火に備えた防災シェルターが身近にあったことから、災害や安全に興味を持つようになる。学部・院では海洋工学を学び、修了後の2015(平成27)年、東洋建設(株)に入社。海上の栈橋工事現場を経て、東京外環自動車道大和田工事に従事している。(取材当時)



久徳がなにより大切にしているのは、一緒に働く者同士の会話。

現在の仕事を指すまでの原体験を尋ねると、久徳は幼い頃に見た記憶に残る映像について話をしてくれた。「倒れている橋ですね。阪神・淡路大震災の時の強烈なニュース映像です。兵庫で暮らす親戚が心配で、ニュースで見ただけものが忘れられませんでした。また、私は九州出身なので、阿蘇山の噴火に備えたシェルターが身近にありました」。縁ある地の災害と地元防災施設。二つの情景が、人を守る構造物を造りたいと幼い久徳の意識に種を蒔いた。

二つの情景から芽生えた意識

「元氣溼刺、笑顔で仕事をしているため」。本連載の取材対象として、そんなふうに社内から推薦コメントが寄せられていた久徳美奈さん。現場を訪ねてみると、入社四年目にして社内外を問わず多くの人から信頼され、次々に声を掛けられる。コミュニケーションを大切にして、誰もが働きやすい現場をつくる現場監督だ。

「最初に一緒に働く人の名前も覚えきれず、現場でのコミュニケーションに苦労しました。念願叶ってか、久徳が最初に配属された現場は海の栈橋工事。しかし、初めて現場に立った時の心境は、仕事に就いた嬉しさよりも強風と海に落ちてしまうことへの不安が勝っていたのだと言う。それでも、工事記録写真を撮りながら現場をじっくり見られたことが勉強になり、次第に楽しい気持ちで現場に通うようになった。海での仕事を終えた久徳が現在いる現場は、うってかわって都市土木。東京外環自動車道大和田工事で現場監督をしている。三社がJVを組み、四つのブロックに分けて行われている大規模な工事だ。久徳の持ち場だけでも一〇〇名ほどの人が携わっている。

「最初は一緒に働く人の名前も覚えきれず、現場でのコミュニケーションに苦労しました。持ち場だけで一〇〇人。いかに周りを巻き込むか」と思い、入社を決めました」

my Beginning 私が建設業界に入った理由
人を守る構造物を造りたい

輝け! けんせつ小町
現場監督

久徳美奈

東洋建設株式会社 関東支店
清水・前田・東洋 東京外環自動車道大和田工事
特定建設工事共同企業体



「けんせつ小町」は、日建連が定めた建設業で活躍する女性の愛称です。





上/広い現場では、コミュニケーションをとるのに携帯電話が必須。頻繁に確認を行う。
左/現場の進捗状況を職人に伝え、情報を共有する。



4ブロックに渡る現場は極めて広大。大きな道路をまたぐように現場が広がっている。

my Growing 私が建設業界で学んだこと 対話を重ね現場を繋ぐ

複数の職人集団がスムーズに仕事をできるかどうかは、私の指示次第なんです。だから、誰に何をお願いするか、どのように報告してもらうかなど、密に連携していくことの大切さを学ばせてもらっています」

この人数の多さに現場の面白みと難しさがあるのだと、彼女は語る。

現場にいる人の名前は、誰であっても覚える
久徳が何よりも気を付けていることが、人の接し方だ。自分から話し掛けること、そして一人ひとりの名前を呼ぶことが大切なのだと彼女は語る。

「どんなことでも相談してもらえよう、話し掛けやすい雰囲気を持つように心掛けています。また、一対一のコミュニケーションでは、お互いの名前を認識することが重要です。打ち合わせなどで普段接する人はもちろん、話す機会が少ない人も必ず名前を呼んで挨拶を交わすことにしています」

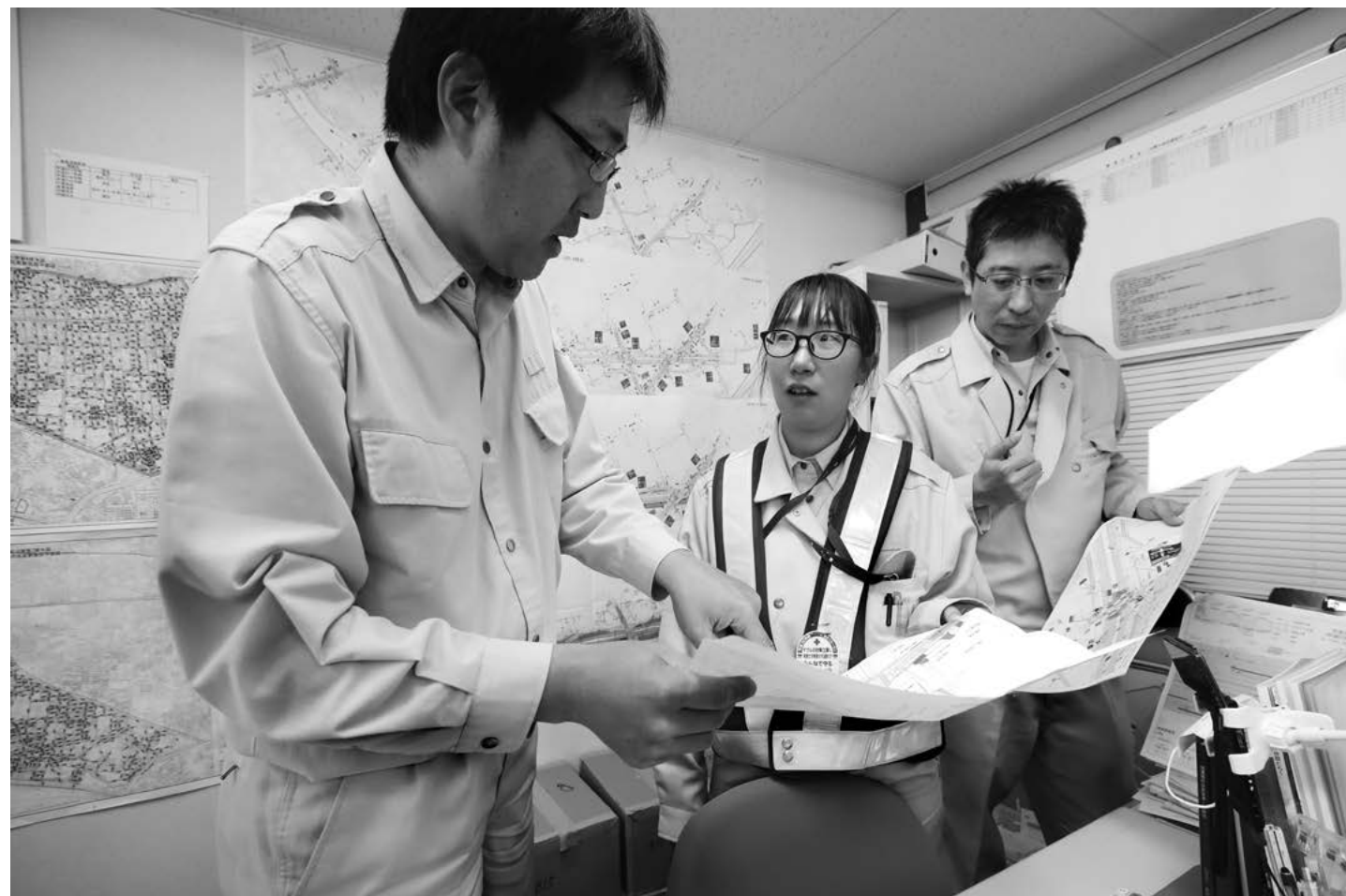
取材時には、すれ違う職人たちから笑顔で話し掛けられる久徳の姿を見ることができた。彼女が現場でどれだけ信頼されているか、現場の人々の反応から窺い知ることができる。彼女はこの経験をどんな経験から学んだのか。気付けてくれたのは、今の現場でJVを組んでいる他社の女性社員だった。

女性も男性も働きやすい環境とは

「現場に配属された時、その方が私を現場の職人さんたちに紹介して回ってくれました。おかげで、その後の仕事がとてもスムーズになりました。挨拶ひとつ、声掛けひとつが仕事を大きく変えるのだと気付いたので、私は何よりもコミュニケーションを大切にしています」

元々は海洋土木を志して入社してきた久徳。これからのキャリアとしては、やはりもう一度海の現場に出たいという気持ちがあるようだ。「気象学を学んでいたの、海上の仕事でそれが生かせるんじゃないかと。海洋土木に強みを持つ会社に入社したからには、海でたくさんすることに挑戦し、吸収していきたいと思っています」

一方、現場への絶対的なこだわりはないという久徳。この先働き続けるならば、自分にとって何が大切かをじっくり見極めたいと言う。働き方に関しては、久徳の上司である渡邊副所長も「女性にとって、当社がとても働きやすいか」というと、難しいですね」と語る。「現場に従事する女性自体がまだ少ないので。環境整備が遅れをとった部分もあると思います。しかし久徳のように意欲的に働いてくれる人にとって、いい環境をつくっていくことを考えていかないといけない」



現場を回った後は事務所に戻り、設計部の職員と自分の目で確かめたものをすぐに共有する。

my style

学生の頃から国内各地に行く機会があり、食べるのが好きなので、各地の名物やキャラクターのミュージアムで限定の食べ物を食べるのを楽しみにしています。移動で飛行機や新幹線に乗るのも楽しみなのですが、なぜか1人で飛行機に乗ると欠航やトラブルに合う確率が高いので移動は余裕をもって計画しています。



都内のミュージアムカフェで食べた限定メニュー

なるのは仕方ないとしながらも、ワークライフバランスについては悩ましくも感じていると言ふ。職場の環境については次のように語った。
 「女性が働きやすい環境はどうすれば実現できるかを考えていくことが必要だと、私は思います」
 社内、現場の人々からその人柄が愛される久徳。仕事に対する真摯さと向上心のみならず、他の社員や協力会社に対しても親身に接して現場を円滑にまとも上げる彼女に、関係者からの期待は高い。そんな彼女に対する評価の背景には、業務における直接的なやりとりの有無に関わらず、現場に携わるすべての人とのコミュニケーションを大切にするという彼女の現場づくりに臨む姿勢があった。久徳は今日も頼もしい現場監督として、現場の人々と言葉を交わす。

my **Growing** 私が建設業界で学んだこと